



株式会社ディグにて(2009年9月)

CLOSE
クローズアップ
UP

みんなの人生が詰まった ジオラマ制作

「ご飯よ!早く帰ってらっしゃいっ」。造形作家の南條亮さんが手掛けたジオラマの前に立つと、甲高いお母さんの声が聞こえてきそう。ゴムとびや鬼ごっこに夢中になっていた子どもの頃がフラッシュバックし、懐かしさかられる。南條さんは明治・大正・昭和の大阪を描き、見た人それぞれの心に何か響くことを願っている。

交通事故が転機に

30歳を前に人形劇団を退職後、まずは自宅の台所をアトリエにして人形制作を始める。徐々に仕事の幅も広がり、会社を設立。現在に至るまで、からくり時計やモニュメント、博物館のディスプレイなどの企画・設計・制作を行ってきた。キッズプラザ大阪開館時(1997年)には玄関口にある巨大ボールサーカスも手掛けた。

並行して、大阪の町のスケッチを続けていた。「高度成長で激変していく中、古い建物が壊され、道具が捨てられることに痛みを感じた。いつかジオラマにして残したい」という思いからだ。しかし仕事に追われる毎日、「このままだったら夢物語で終わってしまう」と焦り始めたのは10年程前。

夜中に自宅で細々とつくり始めるも思うようには進まず、悶々とした日々を送っていた。そんな状態から脱するきっかけとなったのは、交通事故だった。「車にはねられたが、間一髪のところ助かった。その時ものすごく吹っ切れ、『よっしゃ、明日から会社でジオラマをやるう』と決心した」

制作に本格着手

早速会社のメンバーにジオラマづくりを始めることを伝え、「仕事は増えるが給料は減る」ことに納得してくれた人たち約10人で制作に着手。細部まで作り込めるよう、建物は8分の1、人形は7分の1のスケールに設定した。ボタンを押すと大阪弁が聞こえてきたり人形

が動いたり、といった仕掛けにもこだわった。

まず完成したのが、昭和30年代の大阪の町並みだ。八百屋や魚屋などが並び、あめ細工やボン菓子売りのおちゃんもいる。川遊びやままごとに興じる子どもたち、井戸端会議で忙しそうなおとなたちの表情は皆明るく、古き良き時代の平和な日常が広がっている。

芝居小屋が立ち並んでいた明治時代の道頓堀や、大阪大空襲の惨状を描いた作品も出来上がり、これら11のシーンで「人間 この愚かですばらしきもの展」と題した展示を各地で始めた。合計900体の人形を用いた大規模なもので、同時代を生きた人からその曾孫世代まで、飽くことなく作品に見入っている。

万年少年の夢は常設

すべての作品は「明治時代に生まれた男子の成長物語」という筋書きにそってつくっている。「戦争のとき、学徒出陣した人たちは日本の未来に期待を残して死んでいった。その日本が高度成長期にはどう変わったか、その対比ができた」と構想する。

「まだ全体の半分ほどしか完成していない」というが、今後もライフワークとして取り組み続けていく。「作品を通して何かを訴えようという気持ちはまったくない。見る人それぞれが自分の人生を重ね、何かを感じたり考えたりするきっかけになるといい」

目下の課題は、せっかくつくったものを展示できる場所の確保だ。短期のイベントだけでなく、常設できる場所を探している。予算もなく見通しは立っていないが、「廃校になった小学校や施設などを活用したい」と望む。「木造の教室なんかジオラマにぴったりの場所」と自他共に認める万年少年の顔でにんまり笑った。

(文・江中咲紀 / 写真・高島悠介)

プロフィール

造形作家

なん じょう あきら
南條 亮さん



大阪生まれ。武蔵野美術大学油絵科卒業後、人形劇団「クラルテ」で吉田清治氏に師事。舞台美術、人形美術を手掛ける。1971年に独立後、造形作家として活躍。空間演出の企画・デザイン・設計・製作・施行などを手掛ける株式会社ディグ(大阪市西区安治川)の代表取締役。日本ディスプレイデザイン協会会員。